

# 第一章 玉鬘の物語 冷泉帝の大原野行幸

## [第一段 大原野行幸]

\*かく思しいたらぬことなく(殿はいろいろな懸念を思い至らないでもない)、いかで\*よからむことはと(何か上手い方法は無いかと)、\*思し扱ひたまへど(お考えになって対の姫をお世話なさいますが)、\*この音無の滝こそ(あの‘不倫は文化’などと戯れ詠みされた大原の無音の滝のように、殿の分別の無い女好きが高じますと)、うたていとほしく(本当に厭な困りごとで)、南の上の御推し量りごとにならひて(南の上が御推察なさったとおりの)、\*軽々しかるべき御名なれ(分不相応な御評価となってしまう)。 \*「かく」は<主語は源氏。「かく」は下文の内容をさす。>と注にある。相当に分かり難い文だ。普通に読めば<このように思い至らないこともなく>に見えて、「このように」って何なんだ、と思わずツッコまずにはいられない。また脱稿かよ、って思ったら、この注だ。それなら「かく」は<このように>ではなく、明らかに<以下のように>だが、「かく」自体に<以下のように>という語意はあるのだろうか。ただ、そう言えば、現代語の「かく」は「斯くして」や「斯く言う所の」や「斯く言う私」などの常套句に残っているだけだが、必ずしも<以上のように、こうして、したがって>の意味ではなく、むしろ<そうは言っても、そうは見えても>という意味でその後反論や別の詳細を説明することが多い気がする。が、そうなる<以下のように>も違って、「とかく(あれやこれや、何やかや)」に近い感じで<いろいろと>くらいの語意に思える。注に言う<「かく」は下文の内容をさす。>とは下文先読みによるこの文意の解説であって、「かく」という言葉の説明ではない。 \*「よからむ」は注に<源氏の心中。『完訳』は「玉鬘の将来によかれと思う方途をと。自らの恋の関係を持続させたい気持もこもってしよう」と注す。>とある。 \*「思ひ扱ふ」は<大事に世話する>という語法のように古語辞典にも説明されるが、「思ふ、思す」と「扱ふ、扱ひ給ふ」をそれぞれ動詞として読んだ方が、特に此处では含みが多い気がする。 \*「この」の「こ」は指示代名詞かと思うが、此处でも話し手(作者)と聞き手(私)に共通認識できる対象に付いての前振りが無い。ということは、当時の宮廷人に於いては常識である対象体についての話題なのだろうから、今で言う<例の、かの、あの>くらいの語調のようだ。で、その常識であったであろう「音無しの滝」だが、これが大原は比叡山西麓の小野山中腹にある滝の事らしく、「大原野行幸」の枕にしては方角が逆だ。三千院のある大原は洛北東で大原野神社は洛西南にある。それでも此处で「音無の滝」を持ち出すのは、それを承知の洒落心でオオハラ繋がりには掛けたように見える。だとしても、しかしそれがどうして「軽々しかるべき御名なれ(殿の立場では軽率に過ぎる御評判となってしまう)」という比喻になると、当時の宮廷人は納得できたのか、その根拠が分からない。と、注に<「とにかくに人目堤を堰きかねて下に流る音無の滝」(源氏釈所引、出典未詳)。>が参照紹介されていて、「人目」という「堤(妨げ、障り)」でも「堰きかねて(止め切れず、抑え切れずに)」「下に流る(忍んで通じる)」「音無の滝(人目を憚る情)」という‘不倫は文化’の言葉遊びがこのように確かにあったらしいことを示す、説得力ある必脚ではある。が、だとしても、それが大原の「音無しの滝」に対する万民の共通認識だったのかは疑問だ。例えば地下水なら、人目を避けて流れる、という言い方に説得力があるが、目にも音にも触れる滝が「無音」となるのは、神経を何かに集中させていてその滝音にさえ気付かない、という言い方のほうが理に適う。いや、言葉は時として理屈よりも言い回しの妙が立って、もともとの修験者の意味よりも、それを逆手に色事に洒落た印象の方を多くの人が愛した、という事は在ったのかも知れない。それでも、唐突に「この音無の滝こそ」と「音無の滝」を引き合いに出す言い方には、当時の人でも違和感を覚えたような気がしてならない。なお、この「こそ」は「音無の滝」自体を主語とする文体での語用としてではなく、殿が「音無の滝」のように「思し扱ひたまへ」ば「こそ」という、殿が主語の文体での語用として読まなければならないのだろう。とにかく、非常に分かり難い文だ。 \*「軽々しかる

べき御名」はく分不相応に軽率な御評判>みたいな言い方だが、具体的には殿が内大臣から「婿」すなわち義理の子供に見做されてしまう、ということを示しているらしく、下文に続ける為にこうした‘軽妙な’しかし今となっては変にはぐらかした分かり難い言い方に見える、言い回しをしたものようだ。

かの大臣(内大臣は)、何ごとにつけても、きはぎはしう(立場をはっきりとさせて)、すこしもかたはなるさまのことを(少しでも中途半端な状態を)、思し忍ばずなどものしたまふ御心ざまを(我慢なさらないでいらっしゃる御気性なので)、「\*さて思ひ隈なく(そうなれば躊躇なく)、けぎやかなる御もてなしなどのあらむにつけては(はっきりと婿として子ども扱いされるだろうことに付いては)、をこがましようもや(何とも体裁の悪いものだ)」など、思し\*返さふ(殿は対の姫との結婚を思い止まりなさいます)。\*「さて」に付いても、今の話題として直接これを指し示す対象は直前に語られていない。が、まあ、大きな話の流れからして、内大臣に対の姫を実の娘であると明かした上で、殿がその対の姫を妻に迎える、という事態を示しているのだろうとは推測できる。胡蝶第三章第二段で上が殿が言った「いでや、われにても、また忍びがたう、もの思はしき折々ありし御心さまの、思ひ出でらるるふしぶしなくやは」は、紛れも無く殿が不意に男根を挿入してきたことを示している。\*「かへさふ」は動詞「返す(やり直す)」に反復継続の助動詞「ふ」が付いたもの、と大辞泉に説明がある。だから、「思ひ返さふ」はく思い返したままにする→思い止まる>か<何度も考え直す>かのどちらかだ。何度も思い返して来たことは既に語られているので、此処は重大決断ないし最終結論として<思い止まる>と読んで置く。

その師走に(その年の瀬十二月に)、\*大原野の行幸とて(大原野で帝が鷹狩をなさりにお出掛けなさるといふこと)、世に残る人なく見騒ぐを(都中で行列の見物に沸くので)、六条院よりも(六条院からも)、御方々引き出でつつ見たまふ(御夫人方が引き連れて見物にお出掛けになります)。\*「おほはらののぎやうがう」は注に<大原野神社は藤原氏の氏神。醍醐天皇の延長六年(九二八)十二月五日の大原野行幸がその準拠とされる。『新大系』は「野の行幸」で、大原野神社への行幸ではない」と注す。>とある。下文にも、これが大原野神社への参詣行幸ではなしに、鷹狩であったことが語られている。

\*卯の時にいでたまうて(帝御一行は午前六時に御出発なさり)、朱雀より五条の大路を(朱雀大路から五条で)、西ざまに折れたまふ(西に折れなさいます)。桂川のもとまで(桂川に至るまで)、物見車隙なし(物見の車がびっしりです)。\*「うのときにいでたまうて」はく『李部王記』延長六年十二月五日の大原野行幸の記事に一致する。>と注にある。「李部王記(りほうおうき、りぶおうき)」はく醍醐天皇第四皇子重明親王(しげあきらしんのう)の日記で、平安時代中期の政務や朝儀を理解する上での重要な史料である。>とWikipediaにある。

行幸といへど(行幸と言っても)、かならずかうしもあらぬを(いつもなら必ずしもこれほどまでではないが)、今日は親王たち、上達部も、皆心ことに(皆特に気張って)、御馬鞍をととのへ(馬鞍を新調し)、隨身(付き従う衛士や)、馬副の(うまぞひの、馬の口取り役などの)容貌丈だち(顔立ちや背丈の優れた者を選び)、装束を飾りたまうつつ(衣装を飾り立てて)、めづらかにをかし(見応えが合って素晴らしい)。左右大臣(さいうのおとど)、内大臣、納言より下はた(大納言以下までも)、まして残らず仕うまつりたまへり(一人残らず御供に仕え申し上げました)。\*青色の袍(あをいろのうへのきぬ)、\*葡萄染の下襲を(えびぞめのしたがさねを)、殿上人、五位六位まで着たり。\*「青色の袍」は注に<麴塵の袍(きくぢんのほう)。天皇の日常着だが、晴れの儀式には天皇は赤色

の袍を召し、諸臣が麴塵の袍を着る。>とある。Webの色見本で見ると、ざっと青ねずだ。\*「葡萄染」はブドウ色、薄い小豆色。「下襲」は後に長く引きずる飾り布だが、狩装束では太刀柄と帯に挟み懸けるらしい。

雪ただいささかづつうち散りて(雪がほんの少し降って)、道の空さへ艶なり(道の空まで風情があります)。親王たち、上達部なども、鷹にかかづらひたまへるは(鷹狩りを良くなさる方々は)、めづらしき狩の御よそひどもをまうけたまふ(独特の狩装束を着こなしていらっしやいます)。近衛の鷹飼ひどもは(近衛の鷹匠たちは)、まして世に目馴れぬ(さらに一般の服とは違う)\*摺衣を乱れ着つつ(それぞれの所属別の染め柄の作業服を着ていて)、けしきことなり(変わった姿でした)。\*「すりぎぬ」はく染め草の汁で、いろいろな模様を摺り出した狩衣>と古語辞典にある。型染め模様のプリント柄らしい。

めづらしうをかしきことに競ひ出でつつ(多くの人びとが、めづらしく素晴らしい見物に競って出て来て)、\*その人ともなく(どうという身分でもない者の)、かすかなる足弱き車など(粗末な造りの足の弱い車など)、輪を押しひしがれ(人ごみに車輪を押しつぶされて)、あはれげなるもあり(無残に壊されたものもありました)\*浮橋のもとなどにも(桂川に渡した浮橋のたもと近くなどにも)、好ましう立ちさまよふよき車多かり(見映え良く行き来する高級車が多くありました)。\*「その人となし」はく特に名声のある人でもない>という成句らしい。\*「うきはし」はく舟や筏の上に板をわたして橋としたもの>とあるが、そのたもとに見物人が多かったという記述に付いては、注にく『李部王記』の大原野行幸の記事に同じ。>とある。

## [第二段 玉鬘、行幸を見物]

\*西の対の姫君も立ち出でたまへり(対の姫君も見物にお出掛けなさいました)。\*先に、「六条院よりも御方々引き出でつつ見たまふ」と語られており、此处でまた改めて「西の対の姫君も」と行幸が姫の目にどう映ったかを記すのは、この行幸が山吹姫に与えた印象が姫の世界観を変えるとでも言いたそうな作者の意図が露骨に感じられて、あまり滑らかではない筆致に思える。もし、浮橋のもとに六条院の女たちが引き連れ立って見物に来ていて、その中に対の姫の姿もあった、という設定なら、「六条院よりも御方々引き出でつつ見たまふ」を此处で言う方が効果的なのではないだろうか。とにかく暫くは姫の視線で行幸の様子が語られるようだ。

\*そこばく挑み尽くしたまへる人の御容貌ありさまを見たまふに(何しろその多数の着飾りつくしなされた貴人たちの御姿やお振る舞いを御覧になっても)、帝の、赤色の御衣たてまつりて(帝が赤い着物をお召しになって)、うるはしう\*動きなき御かたはらめに(鳳凰を頂いた天皇御輿に御座なさって、美しく微動だになさらない御横顔に)、なずらひきこゆべき人なし(比べ申し上げるべき者は居ません)。\*「そこばく」は「幾許(いくばく、いくだ、ここだ、ここばく、ここら、そこら、そこば)」と同類の語とされ、具体数は示さないが話者と読者にほぼ共通認識される数量で、特に多量を示す語、のようだ。だから、単に<多数の>というよりは<何しろその多数の>くらいの言い方かと思う。\*「動きなき」はく微動だにしない>と訳がある。座した姿、かと思われ、下文に「御輿のうちよりほかに」とあることから、車ではなく御輿に担がれての行幸だったらしい。で、天皇の御輿は「鳳輦(ほうれん、金の鳳凰を天蓋頭頂に飾付けた担ぎ台)」とのこと。古語辞典の参考図で見ても一度に20人くらいで担ぐようで、長距離だとどれくらいの担ぎ手を要したことだろう。だからこそ、権勢の誇示であり、参加者の名誉でもあったのだろう。現代の民主国家に於いては、こうした祭は政治力と結びつく権威の押し付けや権力の横暴および権威勢力の固定化温存という強権排他性が目障り

で、専ら伝統文化や芸能に対する協賛行為として是認される傾向にあると思うが、排他性を伴う地域構成員の偏在同調性は、やはり実りある人生の心の拠り所に成り得るように思えてならない。共通項は救いになるし、それを可能な限り広めることが人類に福音をもたらす側面は確かにあるが、ヒトは有機生命体である以上、数式自体には人生の解が無い、ということは何処かで改めて再確認することも、恐らく重要だ。

わが父大臣を(姫君は我が父と慕う内大臣を)、人知れず目をつけたてまつりたまへど(人知れず熱心に拝見申しなさったが)、きらきらしうものきよげに(派手で美しく)、盛りにはものしたまへど(威勢は良くいらしたが)、限りありかし(最上には至らないようでした)。いと人にすぐれたる(せいぜい誰より勝った)ただ人と(ただうどと、臣下に)見えて、御輿のうちよりほかに(御輿に乗った天子様の他には)、目移るべくもあらず(目を引かれる者も居ませんでした)。

まして(もとより)、容貌ありや(顔立ちが良いやら)、をかしやなど(才能が有るやらなどと)、若き御達の(わかきごたちの、若い女房たちが)\*消えかへり心うつす\*中少将(夢中になって憧れる近衛の中将や少将)、何くれの殿上人やうの人は(その他の有望な若貴公子たちが)、何にもあらず消えわたれるは(何ほどのこともなく全て眼中から消え去ってしまうのは)、さらに類ひなうおはしますなりけり(それ以上に帝が優れたお姿でいらしたからでした)。 \*「消え返る」の「かへる」は<変わり切る、すっかり様変わりする>という接尾語、のようだ。「消ゆ」は<形が無くなる>の他に<放心する、正体を無くす、死ぬ>などあり、「きえかへる」は<夢中になって>。 \*「ちゅうせうしゃう、なにくれのてんじやうびとやうのひと」は注に<『集成』は「中将、少将。ともに近衛府の次官。多く名門の子弟の容姿端麗な者が選ばれる。今日の護衛として帝のお側近くに供奉している」。『完訳』は「中将は柏木、少将は弁少将。ともに内大臣の子息。二人は弓箭を帯して左右の列に分れて行進」と注す。>とある。「弓箭(きゅうせん、ゆみや)」に付いては古語辞典の参照図に「鬨腋の袍(けってきのはう)」という武官の行事用の正装が描かれていた。如何にも派手な乗馬姿が想像される。今でも葵祭などには登場するかも知れない。流鏑馬神事には登場するようだが、京都新聞社のサイトに五月三日の動画があった。因みに今日は2011年5月15日葵祭当日だが、主役は斎王代のような。それでも平安絵巻ではあり、関係者の努力に敬意を表したい。東京でこの動画が見れることは実に有難い。

源氏の大臣の御顔ざまは(源氏殿のお顔立ちは)、\*異ものとも見えたまはぬを(良く似ていらっしやるものの)、思ひなしの今すこしいつかしう(気のせいか今少し帝の方が威厳があつて)、かたじけなくめでたきなり(勿体無く立派でした)。 \*「こともの」は<他のもの。別のもの。>と古語辞典にある。「異物とも見えず」は<別の物に見えない→良く似ている>だから、この文は「まして」と劣位付けられた比較構文の中では高評価の項目なのだが、それだけに接続助詞の「を」は<それを以ってしても>と比較対照を最大評価した上での総論の序を示す、ようだ。構文の主語は一貫して「御輿のうち」の‘帝’であり、当時の人には何でも無い、普通の文かも知れないが、私には妙に難文だ。

\*さは(それは姫にとっては)、かかる類ひはおはしがたかりけり(帝や源氏殿のように美しい方々は滅多にいらっしやらないものなのだと、改めて気付かされることでした)。あてなる人は(上流貴族は)、皆ものきよげにけはひ異なべいものとのみ(皆そろって美しげで普通の人とは違う格別な雰囲気なのだばかり)、大臣、中将などの御にほひに目馴れたまへるを(殿や中将などの御姿に見慣れていらしたが)、\*出で消えども\*かたはなるにやあらむ(この日に供奉する見劣りした臣下たちは不具者なのだろうか)、同じ目鼻とも見えず(同じ目鼻をもつ人の顔とも思えず)、口惜しうぞ圧されたるや(残念ながら帝の威厳に圧倒されていたのです)。 \*「さは~けり」

はくそれは～でした>という文型だろうが、全体が姫の内心印象文には違いなく、此处ではその補語が必要に思える。 \*「いできえ」は「出で映え(いでばえ、見映えの良いこと・出来の良いもの)」の反対語と説明され、<見映えの悪いこと、出来の悪いもの。>と古語辞典にある。「出で消えども」は帝に比べて<見劣りする臣下たち>なのだろう。 \*「かたは」は<片端者、不具者>でいわゆる身障者のこと。

兵部卿宮もおはす。右大将の(右近衛府長官たる藤原右家の大将の)、さばかり(最高武官として)重りかに\*よしめくも(重々しく着飾るのも)、今日によそひいとなまめきて(今日の礼装は一段と艶やかで)、\*やなぐひなど負ひて(矢入れなどを腰に帯びて)、仕うまつりたまへり(供奉なさっていました)。色黒く鬚がちに見えて(色黒の髭を生やした風体で)、いと心づきなし(姫にはとても馴染めません)。\*いかでかは(どうして武官の顔立ちが)、女のつくろひたてたる顔の色あひには似たらむ(女の化粧した顔立ちに似るというのか)。いとわりなきことを(まるで理屈の立たないことを)、若き御心地には(姫の甘いお考えでは)、見おとしたまうてけり(男の雄雄しさを見下げなさっていたのです)。 \*「さばかり」は<その程度に→それらしく→その階級に見合って>。 \*「よしめく」は<由緒ありげに気取る>と古語辞典にあるが、此处では具体的に<着飾る>のだろう。 \*「やなぐひ」は<矢を入れて携行する道具。右腰につける。>と大辞林にある。鶴岡八幡宮所蔵の平やなぐひの画像を Web で見かけた。少しは参考に成ったが、所詮馴染みの無い代物だ。 \*「いかでかは」は疑問や反語や願望を導く副詞とあり、此处では「似たらむ(似るものだろう)」という判断に対する反論だ。注には<『完訳』は「男の顔は女の化粧した顔とは異なるとして、語り手が玉鬢の感想を批判。鬚黒の雄々しさを刻印」と注す。>とある。

大臣の君の思し寄りてのたまふことを(源氏殿が考え付きなさせて姫にお勧めなされたことだが)、「いかがはあらむ(どうしたものか)、宮仕へは(帝にお仕えするのは)、\*心にもあらで(考えてもいなかったのもので、不調法をして)、見苦しきありさまにや(見苦しい様を曝すのではないだろうか)」と思ひつつみたまふを(と違って慎んでいらしたが、帝に敬意を覚えたのか)、「馴れ馴れしき筋などをばもて離れて(お手付き女官の所作に心得がなくても)、おほかたに仕うまつり御覽ぜられむは(公務でお仕えしてお目通りいただくのは)、をかしょうもありなむかし(遣り甲斐のあることかも知れない)」とぞ(というように、この物見で)、思ひ寄りたまうける(姫はお考え付きなさいました)。 \*「心にもあらず」は<思わず、不本意に、無意識に>などとあるが、「見苦しきありさま(見とも無い状態)」になるとしたら、考えていなかった事なので其の為の<用意が無い、準備が無い、心得が無い>という意味で、修行が足りないのだから<不調法をする恐れがある>から、という理屈が立ちそうだ。そして、その不調法は田舎育ちで遊ばれていないから、専ら床崩しに不慣れだ、という姫の劣等感らしい。だから、「馴れ馴れしき筋などをばもて離れて(夜伽を勤める女官ではなく)」、それでも帝に憧れて少しでも御近付き申したい、という乙女心なのだろう。

### [第三段 行幸、大原野に到着]

かうて(そして帝は)、野におはしまし着きて(大原野にお着きあそばして)、御輿とどめ(御輿を止めて)、上達部の平張にもの参り(幕内本陣で食事を召し上がり)、御装束ども(御着衣類を外出用の赤い袍から)、直衣(普段の上着や)、狩のよそひなどに改めたまふほどに(狩用の袴などに着替えなさっている時に)、\*六条院より(六条の太政大臣から)、御酒(おんみき)、御くだものなどたてまつらせたまへり(お菓子などの献上品が届け申し為されました)。今日仕うまつりたまふべく(源氏殿も本日は供奉すべく)、かねて御けしきありけれど(かねて帝から御内意があったの

だが)、\*御物忌のよしを奏せさせたまへりけるなりけり(知人の不幸を理由に欠席することを奏上致しなされたのです)。\*「六条院より」は注に<源氏から。なお、『李部王記』のその日の記事にも「六条院」(宇多法皇)から酒や炭などが献上されたことが記されている。>とある。\*「ものいみ」は古いや暦上の謹慎日と女の出産および近親者の忌中に穢れたことによる外出を控える謹慎とがあるようだが、帝の行幸に対して古いや暦での謹慎は有り得ないし、近親者の不幸にしても其れを理由に供奉を断れるのは相当な近親者の不幸があった場合に限られるだろうに、もし源氏殿の本当の近親者であれば、帝にとっても近親者の筈で、普通ならこうした口実は成立しないのだろう。暗に源氏殿の超絶者ぶりを示したものと読んで良いのだろうか。逆に、公衆の面前での帝との両立が余りに露骨な権勢誇示になりそうで避けたのだろうか。よく分からない趣旨の文だ。

蔵人の(くらうどの、側近殿上の)左衛門尉を(さゑもんのじょうを、左衛門府の大尉を)御使にて(おんつかひにて、御使者として)、\*雉一枝(きじひとえだ、雉を枝の左右に一羽づつ下げた土産物を)たてまつらせたまふ(帝は太政大臣に賜わりあそばします)。仰せ言には何とかや(御添え為されたお言葉はどうでしたか)、さやうの折のことまねぶに(そうした朝廷ごとをお話するのは)、\*わづらはしくなむ(女語りには障りがあります)。\*「雉一枝」は注に<『九条右大臣集』(藤原師輔)に、朱雀院の野の行幸に不参して雉一双を賜った例が見られる。雉の一双(いっさう)を左右の枝に上下して付けるのが作法という(河海抄)。>とある。\*「わづらはし」は<いやだ、うるさい、面倒だ>や<病気だ>などとの意味もあるが、差し障りがある<出来ない、しかねる>という言い方でもある。注には<『集成』は「帝の仰せ言には何とあったか、このような場合のことをお話するのは、女の身に憚りが多いので(やめておきます)。歌以外は省略することをことわる草子地」。『完訳』は「その仰せ言には何とあったか、そのような折のことをつぶさに記しとどめるのもわずらわしいことで--」「女が朝廷儀式の詳細を語るのを避けるための、語り手の省筆」と注す。>とある。

「雪深き小塩山にたつ雉の、古き跡をも今日は尋ねよ」(和歌 29-01)

「一人旅では寂しいと、雉一双を贈ります」(意識 29-01)

\*「小塩山(をしほのやま、おしおやま)」は<京都市西京区大原野にある山。岩塩を産したと伝えられる。大原山。[歌枕]>と大辞泉にある。標高 642mの小山で、麓の大原野神社までは都から平地続きなので、山腹から北東方面を見渡せば叡山を背に京都盆地が見渡せるというロケーションのようで、実際にそうした画像のアップがある京都西山ハイキングコースの一つとして紹介してある楽しそうなサイトもいくつか見たが、頂上が淳和天皇(じゅんなてんのう、786-840、第 53 代在位 823-833)陵となっているというのは独特だ。ただし、山頂の陵墓比定は幕末のようで、崩御当時は遺言により火葬の後にこの山頂で散骨されたという非常に珍しい簡素で陵墓を設けない葬儀だったらしいので、これが「古き跡」なのではないだろう。となると、「発つ雉の古き跡」は何を意味するのか。丸つきしの当て図法だが因みに、故事に「雉(きざし)の頓使(ひたづかい)」という言い方があるようで、意味は<《天つ神の命を受けて葦原(あしはら)の中つ国に降(くだ)った天若日子(あめのわかひこ)が帰ってこないで、キジを遣わしたところ、天若日子はこれを射殺してしまったという古事記の故事から》行ったきりで戻ってこない使い。一説に、副使をつけないでたった一人だけ使いをやることを忌んでいう言葉。>と大辞泉にある。この意味の言葉を添えて帝が殿に左右で一対の雉を贈ったとすれば、一人で「行き深きに立つ(遠出をする)」のは寂しい、という意味になって、「をも今日は尋ねよ(それを察して一緒に来て欲しかった)」という言い方になる、とは読めそうだ。いや是は、途方も無く大辞泉を眺めて掴んだ藁の思い付きだが、今のところ他の解法が見えない。また師走であれば、実際に小塩山は「雪深き」と冠雪していた風情だったのだろう、とは味わって置く。

太政大臣の(おほきおとどの)、かかる野の行幸に仕うまつりたまへる(こうした帝の鷹狩りに供奉なさった)\*例しなどやありけむ(先例などは在ったのでしょうか)。 \*「ためし」に付いては、注に<仁和二年(八八六)十二月十四日の光孝天皇の芹川行幸に太政大臣藤原基経が供奉した例がある(河海抄)。>とある。この文が作者による「古き跡」の解説なのかも知れない。確かに、有力者が同行するかどうかは、行幸が大掛かりになるか簡素なものになるかに関わるかも知れないが、帝に大臣が付き従うこと自体は特別なこととは思えない。御所内の通常警備の留守居役は帝の外出中にも配備されているだろうし、役所ごとの連絡係も誰かしらは詰めているだろう。その上で、この日の行幸は左右大臣と内大臣以下のお歴々が漏れなく付き従ったという盛大さだったようで、そこに太政大臣が同行するか否かに実質で支障のある問題は無かったように思える。やはり帝と源氏殿との特別な間柄を殊更に印象付けようとする作者の設定なのだろうか。でも、今さらそれが特に必要とも思えず、良く分からない。それこそ単に、資料に基づいた描写なのかも知れない。

大臣、御使をかしこまりもてなさせたまふ(御使者を丁重におもてなし為さいます)。

「小塩山深雪積もれる松原に、今日ばかりなる跡やなからむ」(和歌 29-02)

「この御成果を見るにつけ、栄えのほどが偲ばれます」(意識 29-02)

\*注に<「行幸」「み雪」の掛詞。「や」間投助詞、詠嘆の意。今日ほどの盛儀はないことでしょう、の意。>とある。盆地平野の風除けに大原野が「松原」になっていたのだろうか。大原野への街道が松並木だったのかも知れない。「待つ腹(留守居の殿の思い)」の掛詞だろう。「あと」は「足跡」で<後世に残る前例>。「古き跡」を更新する「今日ばかりなる跡(この日に出来たばかりの指標となる記録)」「やなからむ(に違いない)」と今上の誉れを称えたのだろう。許より、小塩山に御幸を掛けた言い回しは、言い換えようが無い。

と、そのころほひ\*聞きしことの(その当時に同行した男衆などから聞き及んだことを)、\*そばそば思ひ出でらるるは(おおよその見当を付けながら思い出すものですから)、\*ひがことにやあらむ(間違いがあるかもしれせん)。 \*「聞きしこと」は注に<『集成』は「語り手の女房の言葉をそのまま伝えた体の草子地」。『完訳』は「以下も、源氏の本心にふれまいとする語り手の言辞」と注す。>とある。鷹狩りに女は同行しないし、幕内の接待にも女は居なかったのだろう。 \*「そばそば」は<はしばし>と古語辞典にあり<輪郭を辿る>語感のようだ。 \*「ひがこと」は<間違い、悪事>。

[第四段 源氏、玉鬘に宮仕えを勧める]

またの日(その翌日)、大臣、西の対に、

「昨日、主上は見たてまつりたまひきや(帝は拝し申し上げなさいましたか)。かのことは(以前からの件は)、思しなびきぬらむや(その気にお成りに為ったでしょうか)」

と聞こえたまへり(とお訪ね為さいました)。白き\*色紙に(白い薄手の光沢紙に)、いとうちとけたる文(飾り気の無い用件だけを)、こまかにけしきばみてもあらぬが(しつこく色めいてもいけないのが)、をかしきを見たまうて(姫はむしろ楽しいとお思いになって)、 \*「色紙」は「しきし」と読みがある。しかし手紙だから、厚紙を用いたとは思えない。となると、「いろがみ」に<種々の色に染めた紙。染

め紙。また、折り紙用の着色した紙。>の他に<鳥の子紙を5色に染め分けた畳紙(たとうがみ)。>という説明があるので、これは「とりのこがみ」のことと読む。「鳥の子紙」は薄手の光沢紙。

「あいなのことや(意地の悪い)」

と笑ひたまふものから(と笑いなさりながら)、「よくも押し量らせたまふものかな(良く私の気持ちを見抜いていらっしゃるものだ)」と思す(とお思いになります)。御返りに(お返事は)、

「昨日は、

うちきらし朝ぐもりせし行幸には、さやかに空の光やは見し (和歌 29-03)

美雪まじりの御幸とて、天の光も見え隠れ (意識 29-03)

\*注には<玉鬘の和歌。「光」は帝の姿を譬喩する。「やは」反語表現。>とある。「うちきらす」は「打ち霧らす」と表記され< [動サ四] 霧・雨・雪などが、空を一面に曇らせる。>と大辞泉にある。訳には<雪が散らついて>とある。確かに、「行幸(みゆき)」が「み雪」でなければ歌にならない。が、それだけのこと、にも見える。

おぼつかなき\*御ことどもになむ(良く分からない事々でした) \*注に<接尾語「ども」複数は帝の顔や宮仕えのことを意味する。>とある。

とあるを、上も見たまふ(南の上も御覧になります)。

「さきのことをそそのかししかど(そうした宮仕えのことを姫にお勧め申したのですが)、中宮かくておはす(当家には帝の後であらせられる中宮がいらして)、ここながらの\*おぼえには(同じ家から帝の御覚えに与る心算の女官に出仕するというのは)、\*便なかるべし(不都合もあるだろう)。 \*この「おぼえ」は「御」がないから帝の「御覚え(御寵愛)」ではない。が、それを意図した姫や殿の「覚え(自負、自覚)」ではあるのだろう。詰まり<帝の御寵愛に与る心算の出仕>だ。 \*「びんなし」は注に<『完訳』は「源氏の娘という扱いは、養女の中宮と競うのが不都合」と注す。>とある。

かの大臣に知られても(内大臣に姫が藤原殿自身の実の娘だと言う事情を知られても)、女御かくてまたさぶらひたまへばなど(正室腹の弘徽殿女御が帝の第一側妃として後宮にいらっしゃるのだから)、思ひ乱るめりし筋なり(姫の出仕に付いては彼の家から出すのも思い悩まれるところです)。若人の(しかし若い女で)、\*さも馴れ仕うまつらむに(内侍の督として帝のお側近くに御仕え申すのが)、\*憚る思ひなからむは(出過ぎた事ではない家柄の者なら)、主上をほの見たてまつりて(帝を少しでもお見掛け申し上げて)、え\*かけ離れて思ふはあらじ(全く出仕を考えずに済む者は居ないだろう) \*「さも馴れ仕うまつらむ」は<実際に帝のお側で身の回りのお世話を申し上げようという>のだから「内侍司(ないしのつかさ)」という女官になることをいみするのだろう。が、太政大臣や内大臣の家柄であれば、その司の長たる尚侍(ないしのかみ)への就任となる。 \*「憚る思ひなからむ」は<気後れに思わなくても良いだろう→辞退しなくても良いような(家柄の者)>となるようだ。 \*「離る」は<別れる、遠ざかる>だが、出家して<世を捨てる>や、官職が<解ける、免職になる>ともあり、此处でも「かけ離れて思ふ」で<全く出仕を考えない>ということだろう。



とのたまへば、

「あな(まあ)、うたて(そんな)。めでたしと見たてまつるとも(いくら御門を御立派と拝し申し上げようと)、心もて宮仕ひ思ひ立たむこそ(浮かれ気分で宮仕えを思い立とうというのは)、いとさし過ぎたる心ならめ(ひどく失礼な考えでしょう)」

とて、笑ひたまふ。

「いで(いや)、そこにしもぞ(あなたにしたって)、めできこえたまはむ(きっと熱を上げなされることでしょう)」

などのたまうて、また御返り、

「あかねさす光は空に曇らぬを、などて行幸に目をきらしけむ (和歌 29-04)

「天の光が照らすなら、御幸は美雪に曇らない (意識 29-04)

\*注にく源氏の返歌。「きらす」「みゆき」「空の光」の語句を受けて返す。「あかねさす」は「光」の枕詞。「みゆき」に「行幸」と「み雪」の意を掛ける。>とある。「あかね」色は朝焼けや夕焼けの色というよりは、夕暮れ時の赤暗い色調で深いアズキ色みたいな感じで、ツル性植物のアカネの根で染めた色とのこと。ただ、アカネの根を染料にして明るい緋色を染め出すことも出来るらしい。ともかく、「茜差す」はく [枕] 茜色に鮮やかに照り映える意から、「日」「昼」「紫」「君」などにかかる。>と大辞泉にある。姫の贈歌に「朝ぐもりせし美雪(行幸)」とあったのに対して、「あかねさす光は空に曇らぬ(朝焼けに空を照らす天の光が曇ることは無い)」と威光によって反論を封じる厳しさで「などて美雪(行幸)に目をきらしけむ(どうして雪で目が霧がかかることなどあろうか)」と理屈立てる。綺麗な言葉で詠んでいるから遊びの風情は残るが、「光は曇らぬ(帝は光を失わない)」と面と向かって言われては、これ以上は洒落が続かない。こう言いたい殿の気持ちは分かるが、こう言ってしまうは何とも大人気ないように見える。

なほ(やはり)、思し立て(決心なさい)」

など、絶えず勧めたまふ(間を置かず姫に出仕をお勧めなさいます)。

#### [第五段 玉鬘、裳着の準備]

「とてもかうても(ともかくも)、まづ\*御裳着のことをこそは(先ず裳着の御祝いを上げ申して、姫の出自を正式にお披露目しなければなるまい)」と思して(と殿はお思いになって)、その御まうけの御調度の(その御装飾用の御道具類に)、こまかなるきよらども加へさせたまひ(手の込んだ上等な物どもを新たに加えてご用意なさって)、何くれの儀式を(何かの儀式と言うと)、御心にはいとも思ほさぬことをだに(殿ご自身は特別豪華にとはお思いで無い事でも)、おのづから\*よだけくいかめしくなるを(御権勢のほどからして、自ずから弥が上にも豪勢になるものを)、まして(まして今度のことは)、「内の大臣にも、\*やがて(いよいよ本当のことを)このついでにや知らせたてまつりてまし(この機会を以ってお知り頂きたい)」と思し寄れば(とお考え付いての

ことなので、いとめでたくなむ(大変念入りな準備になりまして、)。\*年返りて(こうして新年が明けますと)、「二月に(きさらぎに、二月には御裳着を執り行おう)」と思す(と殿はお思いになります)。\*「裳着(もぎ)」はく平安時代、公家の女子が成人したしるしとして、初めて裳を着ける儀式。男子の元服に当たる。一二歳から一四歳の頃、婚儀以前に行うのが習わしであった。吉日を選んで尊長者が腰の紐(ひも)を結び、髪を垂れ髪から結い髪に改めた。>と大辞林にある。ところで当場面は「風俗博物館」サイトに建物模型と人形と衣装とで、画像と解説共に詳しく再現考証されていて、非常に有難い。感涙ものである。そのページの解説にく女子成人式は平安時代以前の時代には髪を結い上げることに重点が置かれていた(「初笄」「髪上」)。垂髪になってから、髪上げの儀式は形だけ行われる様になった。>とある。また、特に注目される説明にく裳着は亥の刻や子の刻といった深夜(午後9時~午前1時)に行われる行事である。年齢は12~14歳。玉鬘の23歳は異例である。>とあって、健康生育自体を祝う内祝いとは違って、公的に一人前と見做す社会的な通過儀礼として、とはいえ割礼などの史実態は不明だが、の意味合いを強く継承した式ではあったらしい。ただ、姫の宮仕えに先立って執り行うと言うのは尤もらしいが、23歳は如何にも遅すぎて、この式の執行を省略したとしても姫の出自を公式に触れるのは何とでも言い繕えるような気はする。やはり源氏殿にとっては、内大臣に事情を知らせることこそが目的で、殿が最も効果的に養育の恩を演出できる場として設定した、ということなのだろう。\*「よだけし」は「弥猛し」と表記されく大げさだ。ぎょうぎょうしい。はなはだしい。>またはくおつくうである。めんどうである。>と大辞林に説明されている。文意からく大掛かりな>という印象は受けるが、「弥(いや、それ以上に)」「猛し(たけし、盛んだ)」の字句に従えばく弥が上にも←普通以上に>という言い換えで良さそうだ。\*「やがて」は古語ではくそのまま、引き続いて、直ちに、すぐに>などとあり、「間を置かない」語感ながらくその結果、遂に、従って>という説明で事態の推移を示す副詞ではあるようで、語用によってはく要するに、すなわち>を意味するらしい。現代語ではくそのうちに>という「間を置く」語感だが、同様にくその結果、遂に>の意を示す副詞だ。ところで、此処の「やがて」は「知らせたてまつりてまし(お知り頂きたい)」事柄を修辭する副詞であり、その「事柄」である省略された主語は文意からして「姫の出生の事情」だろうから、今直ちにというよりは満を持しての打ち明け話であり、現代語風の「間を置いた」語感でくいよいよ、とうとう>くらいの言い換えになると思う。などと考えると、此処にある古語の「やがて~にや」という「間を置いた」特殊語法が、特化して現代語の「やがて」に引き継がれた、ようにも見えて来る。\*渋谷校訂では「としかへりて」を心中文括弧として、此処の文を年末の殿の内心文としてあるようだが、帝の大原野行幸を以って年内の話題は終結していて、此処では具体的な年末から新年の行事ごとは基本的に昨年と同じという事で割愛されて、今は既に年が明けた時点での内心文のように見える。その上で、この「としかへりて」はまとめの地文であり、従って「いとめでたくなむ」を係助詞の余韻中止の句点とせず、そのまま「としかへり」を修辭する、と読みたい。

「女は(をんなは、女というものは)、聞こえ高く(世間から噂されて)、名隠したまふべきほどならぬも(何処の者と隠し切り為されないほどであつても)、人の御女とて(名家のご令嬢として)、籠もりおはするほどは(家の中に閉じ籠っていらっしゃる内は)、かならずしも(家を挙げての行事とは言え必ずしも)、氏神の御つとめなど(氏神様への御参拝などに)、あらはならぬほどなればこそ(参列して公衆の面前にはっきりその家の者として姿を見せずに済んだので)、年月はまぎれ過ぎしたまへ(この数年来は出自を誤魔化して来れたが)、この(今回の宮仕えが)、もし思し寄ることもあらむには(もし思い通りに実現するとすれば、この源氏家の娘として出仕させたのでは)、\*春日の神の御心違ひぬべきも(藤原家の氏神である春日大社の御心に背いてしまうことでもあり)、つひには隠れてやむまじきものから(結局は隠し通せないものなので)、あぢきなく(不都合にも)、わざとがましき後の名まで(私が姫の出生を隠す魂胆が在ったかのような後々までの

噂までも)、\*うたたあるべし(立ってしまいそうだ)。 \*「かすがのかみのみこころ」に付いては、注にく源氏の娘として出仕したら、藤原氏の氏神である春日の神慮に背くことになろう、の意。>とある。出自操作の養子縁組など日常茶飯事だろうに、何かに洒落た言い回しなのか、はたまた何かの布石なのか、ただの思い付きの語呂なのか、此处で氏神の話題を持ち出す作者の意図は今はまだ分からない。因みに、「源氏の氏神」は<清和源氏が氏神として信仰した八幡宮。京都の石清水八幡宮が中心で、一般的に八幡神を守護神とした。>と大辞泉にある。ただ、この物語に於いての光君は、摂津の住吉大社を信奉しているようではある。 \*「うたたある」は<勝手に物事が進んでしまう>ことのように、多くは悪い事態になることが懸念される時に使う言い方らしい。

\*なほなほしき人の際こそ(並の身分の家柄なら)、今様とては(今どきは)、氏改むることのはやすきもあれ(氏を改めることも容易なようだが)」など思しめぐらすに(などと殿は思い巡らし為さって)、「親子の御契り(血縁というものは)、絶ゆべきやうなし(切って切れるものではないようだ)。同じくは(どうせなら)、わが\*心許してを(私の器量の大きさを)、知らせたてまつらむ(藤原殿にお知り頂こう)」 \*此处の文は、源家と藤家それも大臣家同士であってみれば事は軽々しくは運べない、といった趣旨のようで、だから氏神を持ち出したとでも言いたそうだが、対の姫に殿はさんざん戯事を仕掛けて来た挙句の、何を今さらの取っ手付けである。要するに姫を最大限政治的に利用したいという、殿の計算高さの表明、とでも読むべきか。 \*「こころゆるしてを」の「を」は「知らせ奉らん」の対象を示す格助詞だから、「心許して」は<心許してある様>という白ばっくれた臆面も無い言い方を、厚顔にも程があると殿もさすがに気恥ずかしくボカした言い方、なのだろうか、ともかくも体言の省略形ではあるらしく、意味は<度量の大きさ>のようだ。分かり易い、というか、此处まではっきり言うか、という印象だ。源氏殿は政治的な計算から、藤原殿に対の姫の腰結い役を申し入れる、という話の運び、という背景説明らしい。

など思し定めて(などと殿は腹積り為さって)、この\*御腰結には(このおんこしゆひには、この裳着の御祝儀の世話人となる腰結役には)、かの大臣をなむ(ぜひ内大臣をと)、御消息聞こえたまうければ(殿は御都合を手紙でお尋ね申し為さったが)、大宮(三条邸の大宮が)、\*去年の冬つ方より悩みたまふこと(昨年末から体調を崩しなさっていたのが)、\*さらに\*おこたりたまはねば(年が明けても一向に回復為されない)、かかるに合はせて(こうした状態では)、便なかるべきよし(祝儀には都合が悪い旨を)、聞こえたまへり(ご返事申しいらっしやいました)。 \*「こしゆひ」は<袴着(はかまぎ)や裳着(もぎ)の儀式のとき、袴や裳の腰のひもを結ぶ衣紋奉仕の役。徳望のある人が選ばれた。>と大辞泉にある。風俗博物館サイトの「六条院拝見」のページにある裳着の説明では、内大臣は名目上の世話人で姫の着衣時に側居はするが、実際の着付けは側近女房が行ったと人形模型の場面再現付きで記されている。とても分かり易い。 \*「こぞのふゆつかた」という言い方は、今が新年の春だ、ということを示している。 \*「さらに」は<重ねて、更に>ではなく、「さらさら」の語感で<少しも一向に~ない>。 \*「おこたる」は<怠ける>でもあるが<緩む>でもあり、病状が<快方に向かう>でもある。

中将の君も、夜昼(よるひる、朝晩と出仕の行き帰りの度に)、三条にぞさぶらひたまひて(三条宮邸にお見舞いに訪ね申しなさって)、心の隙なくものしたまうて(祖母殿を心配していらっしやるので)、折悪しきを(姫の御裳着という祝儀は折が悪いのを)、いかにせましと思す(殿はどうしたものかとお考えになります)。

「世も(人の寿命は)、いと定めなし(本当に分からないものだ)。宮も亡せさせたまはば(宮がもしお亡くなりになったら)、\*御服あるべきを(孫である対の姫も服喪すべきものだということに)、

知らず顔にてものしたまはむ(知らん顔をしていらっしやったら)、罪深きこと多からむ(罪深いことが多くなってしまう)。おはする世に(宮が生きていらっしやる内に)、このこと表はしてむ(姫の出生の事情をお知らせ申したい) \*「おんぶくあるべき」は注に<大宮は玉鬘の祖母でもある。父方の祖母の服喪期間は五か月。>とある。源氏殿の娘なら義理の孫だが、内大臣の娘なら実の孫である。そして、実に内大臣の実は最年長の娘なのである。

と\*思し取りて(と思ひ至りなさって)、三条の宮に(三条邸の大宮に)、御訪らひがてら渡りたまふ(御見舞い方々お出掛けなさいます)。 \*「おもひとり」は大辞泉に<悟る。わきまえる。理解する。>とあり、また<心に思ひ定める。決心する。>ともあるが、今では使わない言い方だ。「取る」を<採用する、取り上げる>と見れば「思ひ取る」は<結論付ける>となりそうだが、この思索は理詰めなのではなく、考え方の問題だから、「取る」を<行き着く、届く>の語感と見て「思ひ取る」を<思ひ至る>としたい。